

日本の女性達が自然科学者になった動機 —B. Ghezzi の調査(1992)より—

八木 江里

東洋大学経済学部

ベヴァリー・ゲッツィさんは、もともとカナダの小学校教師であったが、モンリオールのマギル大学大学院の教育行政学に社会人入学した。修士論文の作成のために来日し、お茶の水女子大学女性文化研究センター（現ジェンダー研究センター）の客員教授（1989-93）であった八木と関係者の協力のもとに、調査研究を行った。日本女性たちが、どのような動機で科学の道に入ったかは興味ある問題である。広範な国際的な女性をとりまく状況を考察しながら、彼女は（当時院生であった）柘植あづみさんの助けを借りて日本の女性科学者への質問状を作成した。これらの質問状を日本の女性自然科学者たちの組織「日本婦人科学者の会」（現在の日本女性科学者の会）が開催された折、会終了後に配付し、グループ・インタビューも行うこともできた。さらに問題点を深め整理しながら、個人へのインタビューを10人以上行うことに成功し、総計約30人程のデータを集めることができた。これらの女性科学者たちは、主に現職についている当時77才から22才位までの人々であった。現在では、87才から32才位までに相当する。

これらの女性科学者はA,B,C,Dの四つのグループに分類された。Aグループ（1人）は女性が男性と同等な高等教育を受けることができない時代の人である。Bグループ（8）は1925年～1932年に生まれた女性たちで、少女時代には男性に比べて多少レベルの低い教育を受けた場合もあったが、大学では男性と同等の教育を受けた女性たちである。Cグループ（9）は1933年～1954年生まれの人々で、中、高、大学共に男女平等の教育を受けていた。Dグループ（10）はそれよりも若い1955年～1972年生まれの女性を対象にした。

これらの女性たちは、大学以前の学校の先生から大きな影響を受けており、社会や家族からは特に反対を受けていないことが分かった。多くの場合に、女性たちは自分自身の興味に従って科学の分野を選んでおり、中にはパイオニア（専門分野および職場での）になろうとする努力も見受けられた。

A,B,C,Dグループのすべての女性たちは、少女時代から数学を好んでいたことも明らかになった。これから言えることは、女性の自然科学者を増やすには、数学嫌いを作らないこととは言えないだろうか？（私の個人的な意見としては、直接に自然と触れる機会を増やしてアマチュア少女科学者を増やすことも役立つと思われるが。）どのような動機で日本の女性達が自然科学の道に進んだかについて、今回の物理学会のアンケートでは調査していないので、（1992年に出版された）ゲッツィ（Beverly Ghezzi）の論文*をここに紹介した。

* Beverly J. Ghezzi, "An Approach to Japanese Women's Entry to Science," Bulletin of Institute for Women's Studies, Ochanomizu University, Tokyo, New Series No.6, pp.129-181, 1992